

# ファンのもたらす スポーツへの影響力

愛知学院大学 三好ゼミ

# アウトライン

- ▶ 1.はじめに
- ▶ 2.ワールドカップとオリンピック
- ▶ 3.サッカーを最も愛している国
- ▶ 4.ファンが与える力
- ▶ 5.総括・考察

# ①研究動機

- ▶ ワールドカップが開催されたため
- ▶ 『ジャパンはなぜ負けるのか』を読んでファンについて興味を持ったため
- ▶ 日本サッカーを盛り上げるため（ファン目線）

## ②ワールドカップとオリンピック の規模と注目度



▶ オリンピック（※2016年リオデジャネイロ五輪）

種目：28競技306種目

参加国：207カ国

観客動員数：117万人

テレビ視聴者数：36億人（期間中）

▶ ワールドカップ（※2018年ロシア大会）

種目：1種目

参加国：32カ国

観客動員数：303万人

テレビ視聴者数：1億7000万人（日本戦）

▶ ワールドカップ（※2014年ブラジル大会）

種目：1種目

参加国：32カ国

観客動員数：342万9000人

テレビ視聴者数：260億人（全試合）

- ▶ ブラジル大会では1試合平均観客動員数が歴代2位
- ▶ ブラジル大会の1 試合平均観客動員数は5万2千762人
- ▶ 1994年アメリカ大会では、6万8千991人を記録し歴代1位である。



## 歴代ワールドカップ観客動員数BEST3

- ▶ 1位 1994年 アメリカ大会 → 358万7千人
- ▶ 2位 2014年 ブラジル大会 → 342万9千人
- ▶ 3位 2006年 ドイツ大会 → 335万9千人

ワールドカップは世界中の多くの人々が  
**注目・熱中**していることがわかる



サッカーはんぱないっ  
て！！

### ③ サッカーを世界でいちばん愛している国はどこか

- ▶ サッカーを最も熱心にプレイしている国
- ▶ スタジアムに最も足を運ぶ国
- ▶ 世界で最も観戦している国

- ▶ 統計では測りにくい感情の問題のように思えるが、実はデータは存在する
- ▶ サッカーに対する愛情は主に3つの領域に表れ、①サッカーをプレイする②スタジアムへ試合を見に行く③テレビで試合を見るの国際統計がある。

- ▶ FIFA（国際サッカー連盟）は2006年、世界でどれだけの人がサッカーをやっているか数えようとした。「ビッグカウント」と名付けられたこのプロジェクトで、世界では約**2億6500万人**がサッカーをプレイしていることが分かり、その90%以上が男性であった。

## ◎ 調査方法

FIFA（国際サッカー連盟）による「標準的なアンケートとオンラインツール」（ひたすら、サッカーをやっていますか？と尋ねる方法）

## ▶ サッカーを最も熱心にプレイしている国

(人口のうち、サッカーをプレイしている人の割合)

合)

国	割合(%)	国	割合(%)
1. コスタリカ	27	11. アンギラ	12
2. ドイツ	20	12. オーストリア	12
3. フェロー諸島	17	13. ノルウェー	12
4. グアテマラ	16	14. スロバキア	11
5. チリ	16	15. スウェーデン	11
6. パラグアイ	16	16. バミュータ	11
7. アルバ	15	17. アイスランド	11
8. バルバトス	13	18. オランダ	11
9. バヌアツ	13	19. アイスランド	10
10. マリ	12	20. クック諸島	10

## ◎結果

最も熱心にプレイしている国の多くが小さな島国である  
(やることがすくないからか?)

※クラブに登録している人、ときどき公園やビーチなどで友達とボールを蹴りあう人達を含んでおり、圧倒的多数は時々サッカーをプレイする人である。

- ▶ フェロー諸島やノルウェー、アイスランドでは、実に人口の10%前後が登録選手である。
- ▶ また、ドイツ、オランダ、オーストリア、スウェーデンは、いずれもFIFAがまとめた「登録選手数の多い国」トップ20にも入っている。



# スタジアムに最も足を運ぶ国

## ◎ 調査方法

1試合当たり平均観客数の人口に占める割合を導き出す

## ▶ ヨーロッパ5大国の観戦者率

国	割合(%)
イングランド	2.5
スペイン	1.9
ドイツ	1.5
オランダ	1.2
フランス	0.9

## ▶ ヨーロッパの観戦者率トップ4

国	割合(%)
キプロス	4.8
アイスランド	4.4
スコットランド	3.9
ノルウェー	3.7

◎キプロス、アイスランド、スコットランド、ノルウェーのうち、ノルウェーとアイスランドは「サッカーを最も熱心にプレイしている国」の部門でも名前が挙がっている。

▶ スタジアムに足を運ぶ人の数、割合のデータは、その年の**景気**や**人気度**によって激変されるため、毎年この数値は大きく変わる可能性がある。

▶ 例えば、スター選手がその国に来てプレーすることとなれば、その国のスタジアムに足を運ぶ人の割合は大きく上がることとなる。

「※日本で言えば今年の**イニエスタ選手**」



# 世界で最もテレビで観戦している国

## ▶ コアなテレビ観戦者の割合

国	割合(%)	国	割合
1.クロアチア	12.4	11.ドイツ	8.6
2.ノルウェー	11.9	12.ハンガリー	7.9
3.オランダ	11.5	13.イタリア	7.8
4.ウルグアイ	10.7	14.アルゼンチン	7.4
5.デンマーク	9.1	15.インドネシア	7.3
6.セルビア	9.0	16.シンガポール	7.1
7.エクアドル	9.0	17.ルーマニア	7.1
8.ブラジル	8.8	18.イギリス	7.0
9.韓国	8.7	19.レバノン	7.0
10.スウェーデン	8.6		

◎ 自国代表の試合は視聴率が高い。また、W杯といった国際大会で勝ち進めば勝ち進むほど、観戦している人は増加し、この結果の背景には、強烈な「**ナショナリズムの効果**」があるということが分かる。

他に、パブリック・ビューイングの習慣があるドイツなどでは、一つのスクリーンで大勢で見ており、正確な数が導き出されていないことから順位が少し下がっている。

(引用：「ジャパンはなぜ負けるのか」)

# ロシアW杯のファンの統計

## ▶ 日本代表の試合の視聴率

・ コロンビア戦(21時～)

平均**48.7%**

瞬間最高**55.4%**

・ セネガル戦(24時～)

平均**30.9%**

瞬間最高**37.1%**

・ ポーランド戦(23時～)

平均**44.2%**

瞬間最高**54.0%**

・ ベルギー戦(3時～)

平均**30.8%**

瞬間最高**42.6%**

また、9月12日に行われた親善試合である。

- ・ コスタリカ戦

平均視聴率：12.3%

瞬間最高視聴率：16.0%

これらのように、W杯の様な国際大会では、注目度が全然違っており、これだけの差が表れていることがわかる。

その背景には新聞やニュースなどといったメディアの取り上げている大きさによる変化があるといえる。

# 今後の日本でよりサッカーの注目度を 上げるには

- ▶ 日本サッカーをより発展させるには、最近注目を集めているイニエスタ選手のようなスター選手を日本のチームが獲得し、スタジアムに足を運ぶ人を増やし、新聞やニュースなどのメディアに取り上げられるようになれば今後、注目度は上がっていくと思う



## ④ ファンが与える力

- ▶ Jリーグ、ブンデスリーグ(ドイツ)の2つのリーグの勝敗データを収集し比較

# J1リーグでのホーム&アウェイの勝率

## ◎ 調査方法

1993年から2016年までのデータで検証

J1全6774試合の通算勝率を出し、ホームとアウェイの内訳をまとめる

## ◎ 結果

90分以内で勝敗が決まった試合が5159試合、勝敗が決まらなかった試合が1615試合となった

▶ J1での通算勝利数5159のうち

- ・ホーム→2877勝
- ・アウェイ→2282勝
- ・ホームチームの勝率…42.4%
- ・アウェイチームの勝率…33.69%

▶ 大きな差は見られないが、わずかにホームチームの勝率が高い

▶ よって、ファンの応援の力は少なからず結果として出ていると考えられる

(参照：SPAIA掲載コラム記事)

▶ また、  
2004年J1リーグ浦和レッズ対清水エスパルスの  
無観客試合を例に見ると・・・

▶ 試合後のインタビューで  
「もうやりたくないというのが正直な気持ち」や  
「サポーターに突き動かされている部分が多い」  
などと選手達は口にしていた

(引用：産経ニュース記事)

▶ サポーターは選手の**モチベーター**であることがわかる

## ▶ しかし・・・

ITmedia ビジネスオンラインに掲載された松尾順氏のコラムによると地元ファンからの応援が影響したのではなく、審判の「地元びいき」的なジャッジが大きいな影響を与えている書かれている

(参照：ITmedia ビジネスオンライン掲載コラム記事)

# ブンデスリーガを取り上げた理由

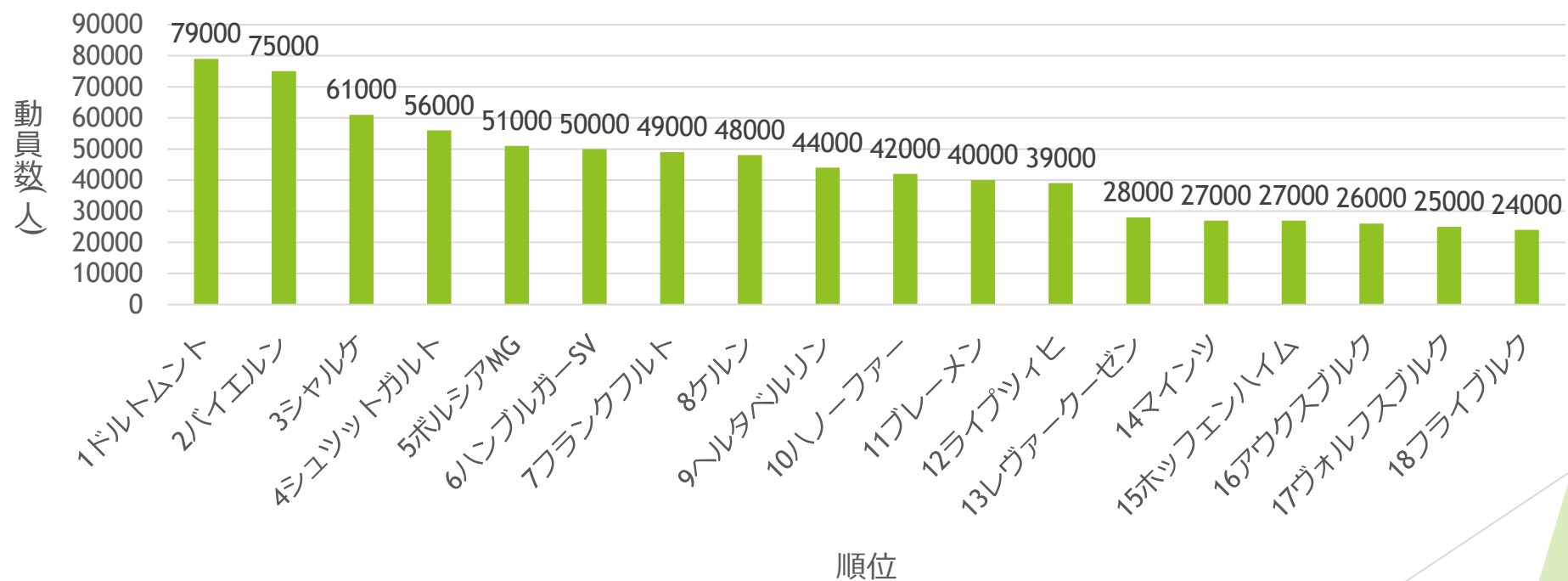
- ▶ 1. 地元サポーターが熱い！
- ▶ 2. 緊張感溢れる試合の連続
- ▶ 3. 日本人選手が多数活躍中！

# 試合平均観客動員数 「2017-2018」

平均観客動員数			
1. ドルトムント	79000人	10. ハノーファー	42000人
2. バイエルン	75000人	11. ブレーメン	40000人
3. シャルケ	61000人	12. ライプツィヒ	39000人
4. シュトゥットガルト	56000人	13. レヴァークーゼン	28000人
5. ボルシアMG	51000人	14. マインツ	27000人
6. ハンブルガーSV	50000人	15. ホッフェンハイム	27000人
7. フランクフルト	49000人	16. アウクスブルク	26000人
8. ケルン	48000人	17. ヴォルフスブルク	25000人
9. ヘルタベルリン	44000人	18. フライブルク	24000人

# 試合平均観客動員数 「2017-2018」

試合平均観客動員数  
「2017-2018」





# 観客動員数が多いクラブが強いのか？ 過去5年のポイントでつけた順位

## 過去5年間の順位

1.バイエルン	10.ブレーメン
2.ドルトムント	11.フランクフルト
3.シャルケ	12.ケルン
4.レヴァークーゼン	13.アウクスブルク
5.ボルシアMG	14.ライプツィヒ
6.ホッフェンハイム	15.フライブルク
7.ヴォルフスブルク	16.シュトゥットガルト
8.ヘルタベルリン	17.ハンブルガーSV
9.マインツ	18.ハノーファー

# 結果

- ▶ 上位3チーム（バイエルン、ドルトムント、シャルケ）は強さ、観客動員数共にドイツ国内で抜けているがその他のチームは"強さ = 観客動員数が多い"というわけではない

# ホームとアウェーで勝率は変わるのか？

## ◎ 調査方法

ブンデスリーガ全18チームの過去3年間（2017年～2015年）のホームの勝率とアウェーの勝率を比較

## ◎ 結果

2015年のたったの2チーム以外全てのチームがホームの勝率が良かった。

# ブンデスリーガ「2015-2016」 ホーム勝率

順位	ホーム勝率	チーム	順位	ホーム勝率	チーム
1	88%	バイエルン	10	35%	シュトゥットガルト
2	82%	ドルトムント	10	35%	フランクフルト
3	76%	ボルシアMG	10	35%	ホッフェンハイム
4	59%	レバークーゼン	13	28%	ブレーメン
5	53%	ヴォルフスブルク	13	28%	ハンブルガーSV
5	53%	ヘルタベルリン	13	28%	ケルン
7	47%	シャルケ	16	24%	ハノーバー
7	47%	マインツ	17	18%	アウクスブルク
9	41%	インゴルシュタット	18	12%	ダルムシュタット

# 「2015-2016」 アウェイ勝率

順位	アウェイ勝率	チーム	順位	アウェイ勝率	チーム
1	76%	バイエルン	9	28%	ケルン
2	59%	ドルトムント	9	28%	ヘルタベルリン
3	47%	レバークーゼン	12	24%	ボルシMG
4	41%	シャルケ	13	18%	シュツットガルト
4	41%	ダルムシュタット	13	18%	ヴォルフスブルク
6	35%	ハンブルガーSV	13	18%	フランクフルト
6	35%	マインツ	13	18%	ホッフェンハイム
6	35%	アウグスブルク	13	18%	ハノーバー
9	28%	ブレーメン	13	18%	インゴルシュタット

# 「2016-2017」 ホーム勝率

順位	ホーム勝率	チーム	順位	ホーム勝率	チーム
1	76%	バイエルン	8	47%	ハンブルガーSV
1	76%	ドルトムント	11	41%	マインツ
3	71%	ヘルタベルリン	11	41%	フランクフルト
3	71%	ライプツィヒ	11	41%	ボルシアMG
5	65%	ホッフェンハイム	14	35%	ダルムシュタット
6	59%	フライブルク	15	28%	レバークーゼン
7	53%	ケルン	15	28%	ヴォルフスブルク
8	47%	ブレーメン	15	28%	アウグスブルク
8	47%	シャルケ	18	24%	インゴルシュタット

# 「2016-2017」 アウェイ勝率

順位	アウェイ勝率	チーム	順位	アウェイ勝率	チーム
1	71%	バイエルン	9	24%	フライブルク
2	47%	ライプツィヒ	9	24%	アウグスブルク
3	35%	レバークーゼン	9	24%	インゴルシュタット
4	28%	ブレーメン	13	18%	シャルケ
4	28%	ドルトムント	13	18%	マインツ
4	28%	ヴォルフスブルク	13	18%	ケルン
4	28%	ホッフェンハイム	13	18%	ヘルタベルリン
4	28%	ボルシアMG	17	12%	ハンブルガーSV
9	24%	フランクフルト	18	6%	ダルムシュタット

# 「2017-2018」 ホーム勝率

順位	ホーム勝率	チーム	順位	ホーム勝率	チーム
1	82%	バイエルン	8	47%	ハノーバー
2	65%	ホッフェンハイム	11	41%	マインツ
3	59%	シャルケ	11	41%	フライブルク
3	59%	シュツットガルト	13	35%	ブレーメン
5	53%	ドルトムント	13	35%	ハンブルガーSV
5	53%	ボルシアMG	13	35%	アウグスブルク
5	53%	ライプツィヒ	16	28%	ヘルタベルリン
8	47%	レバークーゼン	17	18%	ヴォルフスブルク
8	47%	フランクフルト	17	18%	ケルン



# 「2017-2018」 アウェイ勝率

順位	アウェイ勝率	チーム	順位	アウェイ勝率	チーム
1	76%	バイエルン	9	24%	ホッフェンハイム
2	47%	シャルケ	9	24%	ボルシアMG
3	41%	レバークーゼン	9	24%	アウグスブルク
4	35%	ドルトムント	13	18%	ヴォルフスブルク
4	35%	フランクフルト	14	12%	ハンブルガーSV
4	35%	ライプツィヒ	14	12%	マインツ
7	28%	シュツットガルト	14	12%	ケルン
7	28%	ヘルタベルリン	14	12%	ハノーバー
9	24%	ブレーメン	18	6%	フライブルク

# 考えられる要因

- ▶ 環境的・習熟的要因
- ▶ 移動的要因
- ▶ 観客的要因(選手と審判)

## ④まとめ

- ▶ 国内サッカー、海外サッカーとともに審判の地元贖肩が起こってしまう
- ▶ 特に海外サッカー（ブンデスリーガ）のファンはとても熱狂的なので審判も誤審をしたときのブーイングの迫力に圧倒されてしまい、無意識であってもホームチームに有利になってしまう
- ▶ また、中堅クラブや下位クラブがアウェーで上位クラブの試合をする時には「良くて引き分け」という心理が普通でありそういったことがホームの勝率が高い理由なのではないかと思う。

## ⑤総括・考察

- ▶ 国内、海外ともにサッカーの人気度・注目度は他のスポーツより高い
- ▶ ファンの応援は選手だけでなく審判にも影響を与えている(同調力)
- ▶ 日本サッカー界を盛り上げるには、海外での日本人選手の活躍や国内での海外スター選手の活躍が重要である
- ▶ サッカー界全体を通して、審判の技術向上によって、本当の意味でのフェアな戦いができるようになるともっと面白くなると思う

## 参考文献

- ▶ サイモン・クーパー、ステファン・シマンスキー、森田浩之(訳) 『「ジャパン」はなぜ負けるのかー経済学が解明するサッカーの不条理』、NHK出版、2010/3/24
- ▶ SPAIA  
<https://spaia.jp/column/soccer/jleague/4270>
- ▶ ITmedia ビジネスオンライン  
<http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1208/17/news012.html>

